



ほほえみ 第118号

9月になってからの残暑が厳しく、寝苦しい日が続いております。ほほえみ読者の皆様は、夏バテなくお過ごしでしょうか。新型コロナウイルス肺炎は、小康状態のようですが収束とは言えず、今後、第三波が来ないとも限らないので気を抜けません。

集団的知性

集団的知性あるいは集合知というのは、1980年代以降に提案された比較的新しい概念です。三人寄れば文殊の知恵といいますが、もっと多くの人間集団に当てはめると、実は正しい選択ができるということを意味しています。このことは、必ずしも集団の成員が特定の問題に詳しいということではありません。個々人の推測が当たるにせよ、外れるにせよ、集団で答えを求めると、正しい答えに非常に近くなるのです。

これは、非常に奇妙な気持ちになる考え方です。かつて、アダム・スミスが、「神の見えざる手」といったように（実は、彼の書いた国富論には、神の見えざる手という記述は一回しか出てこないようですが）、理由がわからないけれども結果的に上手くいくという、神でしか説明できないような事柄なのです。この考え方は、個人の意思決定を背景にする現代社会の在り方と、真っ向からぶつかる概念です。

具体例としては、先ほどアダム・スミスで取り上げたような市場での決断、政治や技術に関する未来予測、オープンソース・ソフトウェアなどが挙げられています。多様性や集団の大きさが前提になると思われますが、医学で考えるなら、診断学のように論理主体でない部分、例えば、治療経過の予測などは、もしかすると集団的知性で推測可能なかもしれません。逆に、集団的知性で推測されるとわかったら、あたかも何者かに導かれて、結果に辿り着いたと思うのかもしれませんがね。

医学は専門的領域と言われてきましたが、もし、予後の推測が、専門家も一般の人も同様に扱い、並列で情報処理し、正しい推測に辿り着くとしたら、専門性という概念は、この予測に関しては意味をなさないことになるでしょう。というわけで、メインストリームの医学者が研究を行うようには思いませんが、重要な課題なのです。

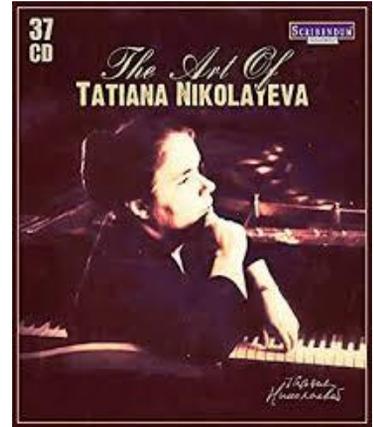
この領域は、人工知能と相性が良いようで、計算や推論のプロセスとして多数のモジュールを用いることと原理的に似た部分があり、最先端領域の一つなのですが、実は医学の推論にも応用可能なのではないかと考えています。



ショスタコーヴィチ

ロシアの難しい名前の作曲家というと、ラフマニノフ、ショスタコーヴィッチ、スクリャーピンなど、曲を聴く前にパスしてしまうことが多いのですが、たまたま、ショスタコーヴィッチの、プレリュードとフーガという曲集が棚にありまして、誰も聞けなそうなので聞いてみました。寝ながら聞いていたのですが、なかなか良い曲が多くて驚きました。タチアナ・ニコラーエワという女性のピアニストの演奏でした。彼女の素晴らしいバッハの演奏が、ショスタコーヴィッチの創作意欲を掻き立てて、バッハにオマージュしたこの曲集を書かせたようです。

一言で言うと、現代的で、素晴らしいジャズピアノを聞いているような感覚があります。むしろ、クラシックというよりジャズの気持ちで聞いてみる方が、今の時代に合っているかもしれません。



加賀棒茶

私の郷里のお隣の石川県のお茶です。茶色いお茶なので、ほうじ茶のようでもあります。棒茶というのはお茶の茎で作ったものです。長めの茶柱のようなものが、沢山入ったといえば、イメージがつかみやすいかもしれません。

このお茶の特徴は、何ともいえない香ばしいさですね。8割方、香りを楽しむものといっても過言ではありませんが、ちょっと贅沢に多めの棒茶を熱湯で香りを立たせるのが良いようです。盛岡では入手困難かもしれませんが、昭和天皇も愛したお茶ということで、機会があれば是非、お試しください。



MEMO

9月のがん化学療法科の予定

9月1日	診療応援(平出先生)
9月8日	診療応援(工藤先生)
9月15日	診療応援(平出先生)
9月21日	敬老の日
9月22日	秋分の意
9月29日	診療応援(平出先生)



暑さ、寒さも彼岸まで